

研 究

作文分析による院内学級の教育の意義の検討

高 橋 剛 実

〔論文要旨〕

本研究では院内学級の教育の意義を捉えることを目的に、入院中の中学生が記した149編の作文を分析した。内容分析の結果、院内学級の教育には入院中の学習面や心理面での向上および治療意欲向上などの治療上の効果、また自己成長や退院後の意欲向上、教師や友だちからのサポート享受に寄与する12の意義があることが見出された。また共起分析から、子どもたちの学習意欲と治療意欲は共に高い状態で共起していることが見出され、医療と教育とが連携してこれら意欲への支援を深めることの重要性が示された。さらに中心性分析から、【個別性に応じた教育の保障】や【入院中の心理適応の促進】、【自己成長の促進】をねらいとした支援の充実を図ることの重要性が示された。

Key words : 院内学級, 病弱教育の意義, 作文, 内容分析, 共起

I. はじめに

文部省は平成6年の「病気療養児の教育について」(通知)¹⁾の中で、病気療養児の教育には「学習の遅れの補完と学力補償」以外にも「積極性・自主性・社会性の涵養」や「心理的安定への寄与」、「病気に対する自己管理能力の育成」、「治療上の効果等」の意義があることを報告している²⁾。これらの意義は病弱教育のねらいとしても捉えられることから教育の現場に重要な知見を提供し、同時に入院中の病気療養児のQOL向上にも資するものである。それゆえ実際に病弱教育を受けている子どもたちがどのような教育の意義を感じているのか、その知見を蓄積していくことは病弱教育における重要な課題としても捉えられるであろう。

特にこれらの意義は子どもたちが自らの言葉で記した作文にも含蓄されていると考えられ、作文を検討することは有用である。そこで本研究では院内学級に在

籍する入院中の病気療養児が記した作文を対象に、その教育の意義を捉えていくことを目的とした。

II. 対象と方法

1. 対象データ

1987年4月～2012年3月までに北海道A病院にある院内学級(病弱・身体虚弱特別支援学級、小児病棟併置)に在籍した入院中の中学生149名の作文149編を対象データとした。作文は「あなたが院内学級で過ごして思ったこと、感じたことを自由に記してください」という教師の指示のもとに、退院前に院内学級で記したものである。

2. 分析方法

i) 記述者の属性分析

記述者の属性は単純集計をした。また記述者の性別および疾患別の年齢と入院日数について、5%を有意

A Study of the Significance of Class-based Inpatient Education through Content Analysis

[2467]

Takemi TAKAHASHI

受付 12.10. 5

北海道苫小牧市立病院院内学級(教諭)

採用 13. 3.25

別刷請求先: 高橋剛実 北海道苫小牧市立病院院内学級 〒053-0034 北海道苫小牧市清水町1-5-20

Tel: 0144-84-0180 Fax: 0144-36-6767 e-mail: chr23840@par.odn.ne.jp

水準とし平均値の差の検定を行った。性別の年齢差、入院日数差の検定は t 検定、他は一元配置分散分析を行った。

ii) 内容分析

Krippendorff の内容分析³⁾の手法を参考に分析した。この手法は言語的記録データの内容を扱うことができ、また事実探索的で現実の事象に関わり、データの文脈を重視して妥当な推論を行うための手法である³⁾。そのため本研究の作文のデータをもとに教育の意義の内容を捉えることができると考えた。

Microsoft メモ帳 ver5.1を用いて作文のデータをテキスト化し、子どもたちが院内学級の教育を受けて自己の学習面や生活面、心理面や医療面などで価値や利点を感じた内容を院内学級の教育の意義の内容を表していると捉え、これらに関する部分を抽出し、1内容ごとに1件のコードとした。そしてその意味内容の類似性に基づきサブカテゴリーに分類し、抽象度の高いカテゴリーにまとめた。各カテゴリーには分類結果を反映した命名を行い、それぞれに分析上の便宜のためアルファベット文字を付与した。分析過程では院内学級教諭2名に分類結果を提示して繰り返し検討を行い、妥当性を高めるように努めた。またカテゴリー分類への一致率をスコットの式⁴⁾に基づき算出し、分析結果の信頼性を検討した。さらに学年や性別でカテゴリーへの記述の有無に関連があるかどうかを検討するために、5%を有意水準としカイ2乗検定(残差分析)を行った。

iii) 共起分析

作文中に共に記されたカテゴリー間の関連性を理解するために共起分析を行った。Microsoft メモ帳 ver5.1を用いて1作文ごとに、該当カテゴリーへの記述がある場合にはそのアルファベット文字を、ない場合には0を、カテゴリーのアルファベット順に入力した。但し1人の作文中に同一カテゴリーが複数ある場合にはデータの偏りを避けるために1つのアルファベット文字のみを入力した。そしてこれらを用いて共起分析を行った。

共起分析では Jaccard 係数により求められた共起の程度が強いカテゴリー間の関連性を描画することができ、出現数が多いカテゴリーほど大きい円で、強い関連ほど太い線で描画される。しかし近くに布置されていても、線で結ばれていなければ強い関連はない点に注意が必要である⁵⁾。ここではこれを“院内学級の教

育の意義の共起マップ(以後、共起マップと略記)”として作成し、カテゴリー間の関連性や作文中に共に記される傾向にあった意義を理解した。

iv) 中心性分析

全カテゴリーの関連性の中で他のカテゴリーとより多くの関連を持ち、支援の中心に置かれるカテゴリーを理解するために中心性分析を行った。ここでは代表的な中心性指標である次数中心性と媒介中心性、固有ベクトル中心性の値をカテゴリーごとに算出して検討した。

中心性の定義は鈴木⁶⁾を参考にし、次数中心性は直接繋がるカテゴリーの数を評価する指標、そして媒介中心性は異なるカテゴリーを結ぶ橋渡しの機能の程度を評価する指標、固有ベクトル中心性は隣接するカテゴリーの中心性を反映させてその中心性を評価する指標とした。

記述者の属性分析、カイ2乗検定(残差分析)には SPSS12.0J for Windows を、共起分析には KH Coder⁷⁾を、中心性分析には KH Coder および統計ソフト R ver.2.12.2を用いた。

3. 倫理的配慮

作文の使用は研究の趣旨と方法、研究協力と中断の自由・拒否する権利、作文のデータおよび結果の取り扱い方、プライバシー保護と匿名性の厳守を口頭・書面で説明し、院内学級所管校長、担当教諭からの同意を得た。作文の引用は上記内容を院内学級所管校長、担当教諭、対象生徒と保護者に口頭・書面で説明し同意の得られた記述者からのみ引用した。

Ⅲ. 結 果

1. 記述者の概要

記述者の概要を表1に示す。記述者の性別および疾患別の年齢と入院日数について平均値の差の検定を行った結果、いずれも有意差はみられないことから、ここでは属性別の検討は行わず中学生全体のデータから分析を行った。

2. 院内学級の教育の意義のカテゴリー

院内学級の教育の意義を示す784コードが抽出され、39サブカテゴリー、12カテゴリーに分類された。各カテゴリーはコード、サブカテゴリーの意味内容を踏まえて命名された。結果を表2に示す。カテゴリー分類

表1 記述者の概要

属 性	記 述 者 数 (人)			年 齢 (歳)		検定結果 ^{a)}	入 院 日 数 (日)		検定結果 ^{a)}
	人	(%)	内 訳 (人)	平均値±標準偏差			平均値±標準偏差		
対象データ全体	149	100.0	(1年48, 2年51, 3年50)	13.7	± .90		51.2	± 21.57	
<性別>									
男子	75	50.3	(1年28, 2年25, 3年22)	13.5	± .93	t= 1.90 n.s.	51.2	± 22.06	t= .02 n.s.
女子	74	49.7	(1年20, 2年26, 3年28)	13.8	± .85		51.1	± 21.21	
<疾患別>									
腎疾患	39	26.2	(1年15, 2年 9, 3年15)	13.5	± 1.00	F= 2.00 n.s.	52.2	± 25.19	F= .59 n.s.
内分泌, 栄養, 代謝疾患	36	24.2	(1年 5, 2年15, 3年16)	14.1	± .83		51.2	± 16.60	
損傷	23	15.4	(1年13, 2年 6, 3年 4)	13.5	± .90		55.8	± 21.43	
呼吸器, 消化器疾患	14	9.4	(1年 5, 2年 5, 3年 4)	13.7	± .73		49.6	± 25.19	
精神, 神経疾患	14	9.4	(1年 2, 2年 5, 3年 7)	13.8	± .80		51.9	± 20.69	
その他	23	15.4	(1年 8, 2年11, 3年 4)	13.5	± .90		45.3	± 21.09	

a)：性別および疾患別の年齢，入院日数について平均値の差の検定を行った。性別の年齢差と入院日数差の検定は *t* 検定，他は一元配置分散分析による検定結果を示す。n.s. は有意差なし。

への一致率は85.9%，83.1%であり，これらは70%以上を示しており⁸⁾，12カテゴリーが信頼性を確保していることを示した。

さらに学年や性別でカテゴリーへの記述の有無に関連があるかどうかを検討するためにカイ2乗検定(残差分析)を行った。その結果，【B:学習の遅れの補完】では，学年と記述の有無との間に関連が認められ($\chi^2(2) = 6.43, p < .05$)，残差分析の結果，中学2年生では51名中5名で有意に記述が少なく(調整済み残差 = -2.3, $p < .05$)，中学3年生では50名中15名で有意に記述が多くみられ(調整済み残差 = 2.1, $p < .05$)，中学1年生では48名中10名の記述がみられた。また【L:友だちとともに頑張れる安心感，心強さ】では，性別と記述の有無との間に関連が認められ($\chi^2(1) = 5.49, p < .05$)，残差分析の結果，男子では75名中12名で有意に記述が少なく(調整済み残差 = -2.3, $p < .05$)，女子では74名中24名で有意に記述が多くみられた(調整済み残差 = 2.3, $p < .05$)。

以下，コードは『』，サブカテゴリーは< >，カテゴリーは【 】で表記し，院内学級の教育の意義の具体的内容について説明する。

i) 【A：個別性に応じた教育の保障】の意義

子どもたちは入院中に教育が受けられる<入院中の教育の保障>の意義や，病気や治療状況，体調の変化

などに応じた授業を受けられること，自分がわからない所から理解できるまで丁寧に教えてくれることなど<個人の能力や病状などに配慮した教育の保障>の意義を実感していた。

ii) 【B：学習の遅れの補完】の意義

院内学級と前籍校が連携し<前籍校との心理的繋がりが，帰属感を保ちつつ>安心して<遅れずに学習ができること>や，<学習の遅れへの不安軽減>に寄与する意義が示された。これらの意義の内容は，院内学級で学習の遅れを取り戻せたことや前籍校の皆と同じように学習ができることで安堵の気持ちを抱いたことを記したものが中心であった。またカイ2乗検定の結果，中学3年生ではこれらの記述が多くみられており，受験期の特徴を反映したものであった。中学2年生ではこれらの記述は少なかったが，その要因を本研究から理解することはできず，今後の検討が必要である。

iii) 【C：学習意欲向上】の意義

『勉強を頑張りたいと思いました』など<学習意欲向上への寄与>を示す意義がみられた。意欲を持ち継続して学習していくことで，『勉強を自分から嫌がらず楽しくできるようになりました』など<学習の喜びや充実感の獲得>や<学習習慣の形成>，<積極性・自主性の涵養>に繋がる意義がみられた。

表2 院内学級の教育の意義のカテゴリー

N=149

コード (代表例)	コード 件数 (件)	記述 人数 (人)	サブカテゴリー	カテゴリー
入院中に勉強がしかりとできてきたので心の焦りがなくなりました。 丁寧でわかりやすい授業でした。 先生がちゃんと僕のために体が疲れないように教えてくれました。	116 (14.8)	65 (43.6)	・ 入院中の教育の保障 ・ 個人の能力や病状などに配慮した教育の保障	A: 個別性に応じた教育の保障
勉強が遅れずにすんだので安心しました。	34 (4.3)	30 (20.1)	・ 遅れずに学習ができること ・ 前籍校との心理的繋がり、帰属感が保てること ・ 学習の遅れへの不安軽減	B: 学習の遅れの補完
勉強を自分から嫌がらず楽しくできるようになりました。 勉強を頑張りたいと思います。	69 (8.8)	46 (30.9)	・ 学習意欲向上への寄与 ・ 学習の喜びや充実感の獲得 ・ 学習習慣の形成 ・ 積極性・自主性の涵養	C: 学習意欲向上
今までわからなかったことがわかってきて自信ができました。 勉強がきちんとわかるようになってだいぶ力がついたと思います。	60 (7.7)	40 (26.8)	・ 学習への自信獲得 ・ 学力向上への寄与 ・ 自己効力感の高まりへの寄与	D: 学習への自信獲得、学力向上
特別活動や自立活動の時間は楽しく夢中になりました。 作るのは難しかったけど出来上がった満足感は大きかったです。	50 (6.4)	37 (24.8)	・ 教師と子ども、子ども同士の信頼関係構築の促進 ・ 作品作りを通じた達成感の獲得 ・ ストレス発散 ・ 心の内面の表出の促進	E: 心理発散の促進
院内学級のおかげで入院生活を楽しく過ごせました。 院内学級に通うことで気分的に健康な感じがしました。	54 (6.9)	40 (26.8)	・ 入院中の心理安定への寄与 ・ 入院中の QOL 向上への寄与 ・ 活力充実・生活リズムの安定への寄与	F: 入院中の心理適応の促進
勉強で自信がついたので病気や治療に精一杯頑張ろうと思いました。 今日の勉強で自分の病気のこともっと知り、規則正しく生活しようと思いました。	75 (9.6)	47 (31.5)	・ 病気や治療に向き合う気持ちを促す ・ 治療意欲向上への寄与 ・ 病気の理解の促進 ・ 自己管理能力向上への寄与	G: 治療意欲向上などの治療上の効果
家族、友だちのいるありがたいがたさにも心に痛みほどよくわかり感謝の気持ちで一杯です。 体の弱い人に対する気持ち、健康が何よりだということを学びました。 院内学級に通って自分自身変わってきたように思います。 私もいつか人を助けられるようになります。	104 (13.3)	49 (32.9)	・ 感謝する心の芽生え ・ 新たな学びや気づきの促進 ・ 自尊心や自己効力感の高まりへの寄与 ・ 自己成長の促進 ・ 将来に夢や希望を育む	H: 自己成長の促進
退院したら自分の学校で頑張りたい院内学級で学んだ事を発揮していきたいです。	52 (6.6)	44 (29.5)	・ 退院後の学校復帰や学習意欲向上への寄与	I: 退院後の学校生活への意欲向上
退院後も自分の体を大切にして健康管理に気をつけていきます。	44 (5.6)	37 (24.8)	・ 退院後の自己管理や治療意欲向上への寄与	J: 退院後の自己管理意欲の向上
先生方がいつも自分のことを考えてくれて心配してくれました。 先生方が緊張や不安を和らげてくれました。 先生方が病気やこれからのことを受け止めてくれたので悩むことはなかったです。 いけないことをしたらちゃんと叱ってくれました。	73 (9.3)	40 (26.8)	・ 思いを受け入れ支えてくれる教師の存在 ・ 教師が支えてくれる安心感、心強さが持てる ・ 社会性の育ちを支えてくれる教師の存在 ・ 教師による病気や入院の緊張、不安の軽減	K: 教師が支えてくれる安心感、心強さ
院内学級に友だちがいたからいつもの元気な自分になれました。 院内学級に友だちがいたから入院生活を乗り越えられたと思います。 病気と闘っている友だちを見て自分も頑張ろうと思うようになりました。 友だちが自分と同じような病気の経験をしているのでも心強かったです。	53 (6.8)	36 (24.2)	・ 友だちを作る機会を得る ・ 心の支えとなる友だちの存在 ・ 病気や入院に向き合える安心感、心強さが持てる ・ 家族、友だちと離れた孤独感、淋しさの軽減	L: 友だちとともに頑張れる安心感、心強さ

※コード件数の%値は全コード784件に対する割合を示し、記述人数の%値は全記述者149人に対する割合を示す。

iv) 【D：学習への自信獲得、学力向上】の意義

『今までわからなかったことがわかってきて自信ができました』、『だいぶ力がついたと思います』などく学習への自信獲得＜や＜学力向上への寄与＞、＜自己効力感の高まりに寄与＞する意義がみられた。これらの意義の内容は、学習面で今までわからなかったことや苦手の勉強ができるようになったこと、学力が向上したことへの思いを記したものが中心であった。

v) 【E：心理発散の促進】の意義

作業学習などを通じてく教師と子ども、子ども同士が信頼関係を構築＜し、また病気や治療のことを一時でも忘れ集中して取り組めることで、『出来上がった満足感は大きかったです』などの＜作品作りを通した達成感の獲得＞や＜ストレス発散＞、＜心の内面の表出＞にも結びつく意義が示された。

vi) 【F：入院中の心理適応の促進】の意義

院内学級に通うことで『何の不安もなく毎日を過ごせました』や『気分的に健康な感じがしました』、『入院生活は充実したものでした』などの入院中の＜心理安定＞や＜QOL 向上＞、＜活力充実＞や＜生活リズムの安定＞に寄与する意義がみられた。

vii) 【G：治療意欲向上などの治療上の効果】の意義

『勉強で自信がついたので病気や治療に精一杯頑張ろうと思いました』、『院内学級の目標は病気を治すことが先にあるので自分でも体のことを思うことが大切だと思います』など学習への自信獲得や教育活動そのものが＜病気や治療に向き合う気持ち＞や＜治療意欲向上＞を促していた。また自立活動などで病気の状態や治療等の理解、生活様式の理解、生活習慣の確立⁹⁾などを深め、『病気のことをもっと知り、規則正しく生活しようと思いました』などく病気の理解の促進＜や＜自己管理能力向上に寄与する＞意義がみられた。

viii) 【H：自己成長の促進】の意義

辛い入院生活の中で子どもたちは家族や教師、医療者の献身的な気持ちを感じく感謝する心の芽生え＜を示した。また病気と向き合う友だちの姿や自己の病気、将来の生活や生き方を見つめる中で、『普通の学校では教えられない何かを学んだような気がします。勉強ではなくてもっと別なもの』、『病気の人の思いや辛さ、大変さなど今では自分で体験し自分で感じることできて何よりの宝になると思います』などく新たな学びや気づきが促進＜されていた。そして『院内学級に通って自分自身変わってきたように思います』、『いつか人

を助けられるようになりたいです』などく自尊心や自己効力感の高まり＜や＜自己成長の促進＞、＜将来に夢や希望を育むこと＞に寄与する意義がみられた。

ix) 【I：退院後の学校生活への意欲向上】の意義

『退院しても病気だからと甘えないで学校で頑張ります』や『これからも勉強っていいもんだなあという気持ちを大切にして頑張っていこうと思います』などく退院後の学校復帰や学習意欲向上への寄与＜を示す意義がみられた。

x) 【J：退院後の自己管理意欲の向上】の意義

自立活動や教育相談などを通して『退院しても病気と向き合いながら毎日の生活に頑張りたいです』や『退院後も自分の体を大切にして健康管理に気をつけていきます』などが表出されており、＜退院後の自己管理や治療意欲向上＞を支える意義がみられた。

xi) 【K：教師が支えてくれる安心感、心強さ】の意義

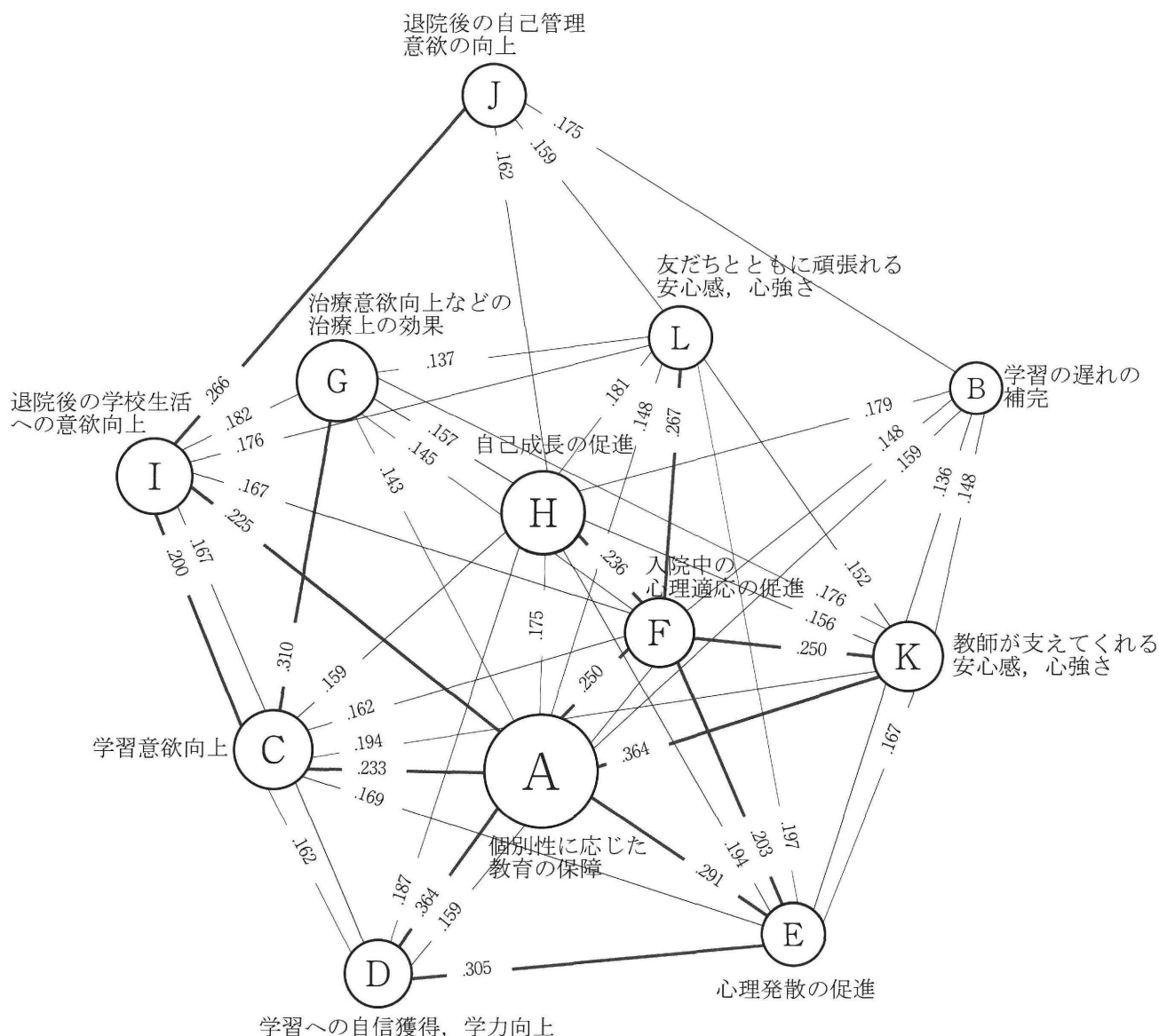
『先生方が病気やこれからのことを受け止めてくれたので悩むことはなかったです』などく教師が思いを受け入れ支えてくれること＜に＜安心感や心強さを抱いている＞記述がみられた。また『いけないことをしたらちゃんと叱ってくれました』などく社会性の育ちを支える＜意義も示された。子どもたちにとって院内学級教師は心の安定を促し心の内にいてくれる存在であり、＜病気や入院の緊張、不安の軽減＞を図り、心の変化を受け入れ尊重してくれる存在として受け入れられているようであった。

xii) 【L：友だちとともに頑張れる安心感、心強さ】の意義

『院内学級に友だちがいたからいつもの元気な自分になれました』や『院内学級にいる人は皆早く病気が治るように頑張っていました。誰だって早く帰りたい気持ちは同じなんだ、それなら私も頑張ろうと思いました』など院内学級でく友だちを作る機会が得られ＜一緒に過ごせることは、＜病気や入院に向き合える安心感、心強さが持てる＞や＜心の支えとなる友だちの存在＞を感じることができ、＜家族、友だちと離れた孤独感、淋しさの軽減＞や入院中の心理適応、病気を乗り越えるための力になっていると感じられた。またカイ2乗検定の結果、これらの記述は女子に多くみられており、友人関係で親密的な関係を求める女子の特徴¹⁰⁾を反映したものであった。

3. カテゴリー間の共起関係

共起マップ(図)は全体的な関連性の把握と視覚的



※数値はJaccard係数の値を示す。

上図はJaccard ≥ 0.136 の共起関係を示し, Jaccard ≥ 0.200 は太線で結び表した。

図 院内学級の教育の意義の共起マップ

な解釈可能性を考慮して Jaccard 係数の値が0.136以上の共起関係を示し, またその値が0.200以上は比較強い関連性があると捉えカテゴリー間を太線で結び表した。

中心性分析の結果(表3), 【A: 個別性に応じた教育の保障】, 【F: 入院中の心理適応の促進】の各中心性の値は高く, 【H: 自己成長の促進】の媒介中心性の値は高い値を示した。

IV. 考 察

1. 院内学級の教育の意義のカテゴリー

本研究で見出された意義のうち, 「病気療養児の教

育について」(通知)¹⁾で示された意義は, 【A: 個別性に応じた教育の保障】, 【B: 学習の遅れの補完】, 【C: 学習意欲向上】, 【D: 学習への自信獲得, 学力向上】, 【F: 入院中の心理適応の促進】, 【G: 治療意欲向上などの治療上の効果】の中でみられた。また【E: 心理発散の促進】, 【I: 退院後の学校生活への意欲向上】, 【K: 教師が支えてくれる安心感, 心強さ】, 【L: 友だちとともに頑張れる安心感, 心強さ】の意義も報告されており^{11~14)}, これらは本研究の結果の内容妥当性を示すものであった。

内容分析の結果, 子どもたちは【A: 個別性に応じた教育の保障】, 【B: 学習の遅れの補完】, 【C: 学習

表3 中心性分析の結果

カテゴリー	次数中心性		媒介中心性		固有ベクトル中心性	
A : 個別性に応じた教育の保障	10.000	(1)	2.652	(2)	1.000	(1)
B : 学習の遅れの補完	6.000	(10)	1.167	(6)	.421	(11)
C : 学習意欲向上	8.000	(4)	1.110	(8)	.719	(6)
D : 学習への自信獲得, 学力向上	6.000	(10)	.343	(12)	.669	(7)
E : 心理発散の促進	8.000	(4)	1.160	(7)	.766	(3)
F : 入院中の心理適応の促進	10.000	(1)	2.652	(2)	.862	(2)
G : 治療意欲向上などの治療上の効果	7.000	(8)	.486	(11)	.572	(9)
H : 自己成長の促進	10.000	(1)	4.276	(1)	.744	(5)
I : 退院後の学校生活への意欲向上	7.000	(8)	2.376	(4)	.561	(10)
J : 退院後の自己管理意欲の向上	4.000	(12)	.643	(10)	.273	(12)
K : 教師が支えてくれる安心感, 心強さ	8.000	(4)	.926	(9)	.752	(4)
L : 友だちとともに頑張れる安心感, 心強さ	8.000	(4)	2.210	(5)	.616	(8)

※数値は中心性の値を示し, () 内の数値は順位を示す。

意欲向上】、【D:学習への自信獲得, 学力向上】の意義や, 作業学習などを通じて【E:心理発散の促進】の意義を実感していた。そして院内学級で教師や友だちと過ごす中で【K:教師が支えてくれる安心感, 心強さ】や【L:友だちとともに頑張れる安心感, 心強さ】を心に抱き, また学習中に自分で考え行動することで自らできることに頑張ろうとする気持ちが芽生えていた。これらは【F:入院中の心理適応の促進】や【C:学習意欲向上】、【G:治療意欲向上などの治療上の効果】にも繋がるものであった。子どもたちは自己の病気や将来を見つめ, 自己洞察や自己理解を深める中で心の変容が起こり, 【H:自己成長の促進】がみられていた。院内学級の教育はこれらの過程に寄与し, また【I:退院後の学校生活への意欲向上】や【J:退院後の自己管理意欲の向上】にも寄与していた。

2. カテゴリー間の共起関係

本研究で見出されたカテゴリーの内容は子ども自身が院内学級で教育を受けた実際の体験に基づく生の思いや状況, 状態などを反映したものとして捉えられる。こうした意味でカテゴリー間の共起関係は, 院内学級の教育に対し作文中に共に記される傾向にあった意義を示すものとして捉えられるが, 実際に子どもたちの中で共に抱いた思いや状況, 状態などを反映したもの

としてその関連性を捉えていくことも可能であろう。特に【C:学習意欲向上】と【G:治療意欲向上などの治療上の効果】との共起関係は(図), 子どもたちはこれらの意義を作文中に共に記す傾向にあったが, 子どもたちの中で学習意欲と治療意欲は共に高い状態がみられる傾向にあり, これら両者の関連性が捉えられた。また【I:退院後の学校生活への意欲向上】と【J:退院後の自己管理意欲の向上】との共起関係も示されており, 医療と教育とが連携してこれら意欲への支援を深めることの重要性が示された。

中心性分析の結果, 【A:個別性に応じた教育の保障】と【F:入院中の心理適応の促進】の各中心性の値は高く, これらの意義は他の意義と多くの関連を持ち, 支援の中心に置かれる内容を含むものと考えられた。特に図を見ると, 【A:個別性に応じた教育の保障】への支援を深めていくことで【C:学習意欲向上】、【D:学習への自信獲得, 学力向上】、【E:心理発散の促進】、【F:入院中の心理適応の促進】、【I:退院後の学校生活への意欲向上】、【K:教師が支えてくれる安心感, 心強さ】にも寄与できるのではないかと推測された。また【F:入院中の心理適応の促進】を図るためには, 【A:個別性に応じた教育の保障】、【E:心理発散の促進】、【K:教師が支えてくれる安心感, 心強さ】、【L:友だちとともに頑張れる安心感, 心強さ】への支援を

深めていくことが重要ではないかと推測された。

また【H:自己成長の促進】は媒介中心性の値が高く、特に【F:入院中の心理適応の促進】との関連が強いことから、【F:入院中の心理適応の促進】をねらいとした支援の充実を図ることで【H:自己成長の促進】にも寄与し、また【H:自己成長の促進】と共起関係にある他の意義を実感することにも繋がるのではないかと推測された。

3. 本研究の限界と課題

本研究で見出されたカテゴリーは子ども自身が院内学級の教育にどのような意義を感じているのかを直接質問して捉えたものではない。したがってこれらから捉えた場合には新たな意義が見出される可能性がある。またカテゴリー間の共起関係を検討したが、因果関係が包含されているかは検証できていない。そのため今後はカテゴリー間の共起関係がみられた個々の作文に対して因果関係の有無も含めて解釈的作業を行い、さらに影響性を持つ他の要因をも検討しながら因果関係を系統的に把握していく中で、子どもたちが感じる教育の意義の内容を促進するためにどのような支援が必要なのかを明らかにしていくことが必要であろう。また作文に対して形態素解析を行うことで記述傾向の強いキーワードを特定することができ、これらから量的に教育の意義を捉えていくことで、より信頼性や妥当性が高まる結果が得られるものと考えられる。

本研究では教育の意義について検討してきたが、作文中には院内学級の教育への不安や不満点も記されていた。子どもたちは院内学級の入級時に、『最初はどんな勉強の仕方なのか、どんな先生なのかなと思って院内学級に行くのがすごく不安でした』などの不安や緊張の気持ちを記していた(17名)。また『自分の学校の先生と勉強の教え方が少し違うので戸惑いました』や『違う学年の子も増えて勉強の進む所や病気もそれぞれ違うので、集中できない時もありました』など入籍者数の増加や複式教育、病状などの個別性に応じた学習内容や指導法に関する不満を記していた(7名)。これらは院内学級の教育における重要課題として捉えられ、今後はこれらの実態を調査し、病弱教育の質の向上に向けた検討を十分に行っていく必要がある。

V. 結 論

1. 院内学級の教育には入院中の学習面や心理面での向上および治療意欲向上などの治療上の効果、また自己成長や退院後の意欲向上、教師や友だちからのサポート享受に寄与する12の意義があることが見出された。
2. 子どもたちの学習意欲と治療意欲は共に高い状態で共起しており、医療と教育とが連携してこれら意欲への支援を深めることの重要性が示された。
3. 【個別性に応じた教育の保障】や【入院中の心理適応の促進】、【自己成長の促進】は他の意義との関連が強く、これらをねらいとした支援の充実の重要性が示された。

文 献

- 1) 文部省. 病気療養児の教育について(通知). 文初特第294号 平成6年12月21日.
- 2) 横田雅史. 病弱教育の現状と課題. 教育と医学 1995; 43 (7): 592-600.
- 3) Krippendorff K. メッセージ分析の技法「内容分析」への招待. 三上俊治, 椎野信雄, 橋元良明, 訳. 第1版. 東京: 勁草書房, 1989.
- 4) Scott WA. Reliability of Content Analysis: The Case of Nominal Scale Coding. Public Opinion Quarterly 1955; 19 (3): 321-325.
- 5) 樋口耕一. KH Coder 2.x リファレンス・マニュアル. http://jaist.dl.sourceforge.net/project/khc/Manual/khcoder_manual.pdf アクセス2012.09.25.
- 6) 鈴木 努. Rで学ぶデータサイエンス8. 金 明哲編. ネットワーク分析. 第1版. 東京: 共立出版, 2009.
- 7) 樋口耕一. テキスト型データの計量的分析—2つのアプローチの峻別と統合—. 理論と方法 2004; 19 (1): 101-115.
- 8) 舟島なをみ. 質的研究への挑戦. 第2版. 東京: 医学書院, 2007.
- 9) 武田鉄郎. 腎疾患児の自己効力感と対処行動, 主観的健康統制感との関連—入院している中学部生徒を対象に一. 国立特殊教育総合研究所研究紀要 2000; 27: 1-9.
- 10) 榎本淳子. 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達の变化. 教育心理学研究 1999; 47 (2): 180-190.

- 11) 伊藤良子, 中橋富美恵. 院内学級に通う児童のストレスの実態と心理的ケアについて—全国実態調査の結果から—. 発達障害研究 1999; 21 (3) : 229-234.
- 12) 松井一郎. 提言 これからの病弱教育に望むこと—医療の立場から—. 特殊教育 1995; 81 : 8-11.
- 13) 中村 豊, 村上龍助, 中谷恭子. 心身医学的アプローチを必要とする小児を治療するにあたって院内学級が果たす役割. 小児保健研究 2003; 62 (2) : 219-223.
- 14) 清水章子, 三輪由香, 渡辺みづほ, 他. 大学病院小児科における院内学級との連携の治療的意義について. 小児の精神と神経 2000; 40 (1) : 26-34.

[Summary]

This study analyzed 149 compositions by inpatient junior high-school students to assess the significance of class-based inpatient education. The results identified 12 significant areas within class-based inpatient education that contributed to treatment outcomes. These included

the following : improvements in inpatients' attitudes toward their studies, improvements in their psychological well-being as well as personal growth, and the effects of their treatment. For instance, motivating the students for treatment and after getting discharged, and also the support received from teachers and friends during hospitalization. In addition, co-occurrence analysis identified the co-occurrence among children with high motivation for learning and treatment, demonstrating the importance of coordinating medical treatment and education to further support these motivations. Moreover, the importance of supporting "the assurance of individualized study requirements" and "promotion of appropriate inpatient mentality and personal growth" was indicated by centrality analysis.

[Key words]

inpatient classes, significance of patient education, composition, content analysis, co-occurrence